

★カルヴァンの考え方では、「神の栄光は下から来る」。どういう意味だろう？

神は、強者（権力者・富裕者など）の味方である以上に、社会的弱者（庶民・貧者など）の味方である。その意味で神は社会的弱者のかたわらにいる（＝強者になればなるほど神から離れていく）という意味。なぜなら、イエスが「山上の垂訓」で示したように、神はすべての人間の中でも特に弱者により多くの愛を注いでいるからである。

この精神は、単なる（“上から目線”的な）弱者保護には止まらず、もっと突き詰めれば弱者のために社会があるというほどの徹底した弱者中心主義につながっていく。たとえば戦後まもなく障害児施設「近江学園」を築いた糸賀一雄は「この子らを世の光に」という言葉を残した（「この子らに世の光を」ではない点に注意）。糸賀の言葉は、障害児が社会の負担となるのではなく、障害児の存在それ自体が社会を明るくする原動力になるような社会をめざしていると言える。ここに「神の栄光が下から来る」社会の理想が示されているとも言えるのではないだろうか。

「神の栄光は下から来る」という発想は、「神の恩寵は教会を通してもたらされる」と説いて「教会は一般人よりも神に近いところ（上位）にいる」と考えていた中世カトリック教会の発想とは、まったく正反対である。

しかし多くの日本人にとって、「神の栄光は下から来る」という発想は難しく感じるかも知れない。たとえば天皇を神とあがめ奉る伝統的な価値観においては、「神の栄光は上から降りてくる」のが当たり前だからである。有名難関大学を卒業して社長になったり大臣になったり、要するに「出世する」ことを「人の上に立つこと、天皇に近づくこと」だと考える人々の価値観も、ひよつとすると中世のカトリック教会と同じなのかも知れない。